

本資料は、国指定重要文化財、三浦梅園著作中三〇種二一二冊中の第一主著『玄語』最終稿本の図版のみを収録したものである。

『玄語』の文は難解であり、何度読んでも分からないのが普通であるが、図は非常に明瞭に描かれており、また、美的でもあり、理解できなくともじっくりと眺めることが出来る。また、漢文法という壁がないために梅園の思考に直感的に迫ることができるといふ点では、文よりもずっと優れた特質を持つ。

『玄語』の図版のみを集めたものとしては、辛島詢士編『玄語図全影』があつたが、これは図版は自筆の複写であるが、その配置を勝手に変更しており、梅園の思考を理解するには、これは図に問題があつた。『玄語』の図は、見開き、表裏などの関係が構造的な意味を持つているため、これを勝手に編集してはならないのであるが、『梅園全集』発刊以降すべての出版物が、この禁を冒してしまつていたのであるが、その資料状況からして、『玄語』の学術的な研究など出来るはずがないのであつた。そのうえで、屋上屋を重ねるように論文や著作物が刊行されてきたのである。そのどれもこれもが、無理解の上の誤解としか言いようのないものであつた。少数の例外はあるが、ほとんどは、間違つていたのである。それは、資料整備を怠つたまま、功を求めて出版のために出版を行つてきた関係者の罪とすべきものである。それは初代研究者の三枝博音から今日に至るまで変わっていない。

今回出版されるこの玄語図集は、そういう問題を解決したものである。すなわち『玄語』の図版を、表裏見開きに至るまで、極力忠実に再現したものである。

この図集は、すでにインターネット上のデータベース「三浦梅園の謎を解く」に公開されていゝるものであるが、表裏・見開きの再現だけは、本にしないと分からない。梅園は『玄語』において印刷物の物理的特質までも表現の手段としていゝるのである。『玄語』を読むには漢文といふ壁を越えねばならないのであるが、『玄語』の図は、漢文とは無縁の人たちにも興味深いインスピレーションを与えることであらう。

注意すべきは、『玄語』は和学の一類であると言ふことである。それは、漢学と洋学の双方に対して立てられたアンチテーゼであり、漢洋の諸学に屈しない、妥協なき日本人の思考の記録である。

凡例

- 一、本資料の図版は、「初筆復元版玄語」（北林達也編）に収録されているものと同である。すなわち本図集も初筆を復元したものである。
- 二、従って、梅園の自身の明らかな誤記であって、版下本製作段階で既にその過ちが指もしくは訂正されているものについては、本資料でも訂正されている。
- 三、例外的にあとから書き加えられた図名などが載せられている場合がある。それらは著では朱筆であるが、本資料は墨刷なので色の再現は出来ていない。このような場合は、ページの左下に断り書きをしている。
- 四、目次の図の通し番号は、二十五番までは岩波版玄語のそれに合っているが、二十六番からは、ひとつずつずれている。これは、初筆では「地影図」というふたつの図であったものを、版下本では、「日地分圈図一合」という一図にまとめられていることによる。ずれているが照合は容易である。双方を照合することによって、初筆と版下本の相違を見ることが出来る。訂正は梅園のものと思われるもの、黄鶴のもの、と思われるもの、判別不可能なものが混在しており、これらを明確に取捨することは不可能である。
- 五、双弦弧図の図番号は、一〇二aと一〇二bとした。電子データベースもこれに合っている。岩波版では、一〇一と一〇二である。したがって、一〇三番からは、本資料と岩波版の番号は同じになるが、抹消されていた「堅動植図一合」を一三三番として復元したため、ここからまたひとつ番号がずれる。最終的には、岩波版が一四〇図、本資料が一四一図となる。
- 六、開いて一対になる一合図を「見開き一合図」、表裏で一対になる一合図を「表裏一合図」と称することにする。
- 七、目次の図名の麁は粗に改めた。その他旧漢字などは読みやすいように改めた。

八、 図名は返り点送り仮名に従って読むのが正しいが、便宜的には音読でよい。「一不
図」は解意的には梅園の指示に従って「いち、ず」のぼらずと読むのが正しいが、
「いち、ふじょうず」と読まれている。「相食混成図」は「あいのみこんせい」のずである
が、便宜的には「そうしよくこんせいず」でよい。

九、 目次において、本宗を大冊としているのは、例旨に「本宗は天地の兩冊を包む。我
爲に大冊と爲す」とあることによる。これによって、玄語全体が、大小天地の四つ
リーに統括されていることが分かる。玄語は一気に四つに展開されているのである。のカテゴ